

事例 3

タイトル: 自分で自分の願いがかなえられないイライラ

. <事例の状況>

Aさんは施設生活の不満を口にする。「他人が部屋に入る。」「道具を全部家に置いてきてしまった。」「いつになったらここをやめさせてもらえるのか。」等。特に洋服に関しては、「盗られた。」と、徘徊のある3名の利用者を敵視し、暴言、時には手を上げる事もある。洋服を自室に置き、本人が選んで着替えられるように配慮してみたが、衣装ケースの奥やかばんの中に隠すようにしまい込み、同じ服を着続けている事も多い。まだ残暑の1週間、娘が送ってきた秋物をずっと着ていたため、入浴日に一緒に着替えを選ぼうと誘うと、「ろくなものがない。」「ここに洗濯出すと返ってこない。」と拒否。「明日帰るから。」「今朝着たばかり。」と表情が険しい。いつも一緒にの女性入居者にも、「あんたたちもどうせ帰るんだからそのままでもいいわよ。」と強い口調で同意を求める。その後その入居者が入浴に行ったためついて行く。こちらで用意した似たデザインの服に対しては、特に反応なく着替える。

【この事例で課題と感じている点】

本人が自身の状態や立場、施設のサービスに強い不安や不満を感じ続けている。

Aさんと関わる時間が不足しているか、関わり方が間違っている。

不信感をあらわにされると、対応する職員のストレスが強い。

. <キーワード>

不信感。 選ばせてもらえない。 選べなくなった。 何もかも無くなる。

. <事例概要>

【年齢】 70代半ば

【性別】 女性

【職歴】 専業主婦

【家族構成】 独居(一人娘とは別居)-

【認知機能】 HDS-R 11点

【要介護状態区分】 要介護2

【認知症高齢者の日常生活自立度】 a

【既往歴】 老人性うつ病 心房細動 甲状腺機能亢進症

【現病】 アルツハイマー型認知症 心房細動 甲状腺機能低下症

【服用薬】 ワーファリン・セルシン・レボトミン・ゾピクール・デゾラチ

【コミュニケーション能力】 自分に話しかけてくる他利用者、施設職員とは積極的に関わりを持ち、ユーモアを理解する。会話の相手が、その時によって昔の友人や学校の先生になり、呼び名も自分が思った名前と呼ぶが、利用者と職員(制服/白衣着用)の区別はつけている。電話で話すことに支障は無く、電話番号を大きく紙に書き、操作を手伝えれば掛けることもできる。友人の面会を受ければ、とっさに名前は出てこないが、誰であるかは判り、つじつまを合

わせつつ会話する。

【性格・気質】 社交的。 勝気。 思い込みが強い。 小心。

【A D L】 自立

【障害老人自立度】 A 1

【生きがい・趣味】 人のおしゃべり

【生活歴】 小さい頃は田舎で木登りや川遊び、自転車乗りなど活発に外で過ごす子供だった。結婚後は会社員の夫と娘とともに転勤の多い生活をしていた。夫の退職を機に、実家にも近い住所地に落ち着く。娘は仕事の関係で県外に在住、結婚。ほどなく夫が病死し、独居となったが、夫の仕事関係、本人の友人の訪問も多く、また、多趣味であるため社交的な生活を送っていた。数年後、70代前半の時に体調を崩したことをきっかけに精神状態が不安定となり、妹が同居したが、妹と感情的金銭的トラブルがあり、状態が悪化する。自殺しようとしたり、近所や娘への頻回な電話を繰り返して精神科を受診。老人性うつ病、2ヵ月後にはアルツハイマー型認知症と診断され独居困難となる。特養に入所となったが、毎日のように自宅に戻ろうと出て行くため、対応困難となり、同年当施設入所となる。

【人間関係】 キーパーソンである娘は、ずっと離れて暮らしていたため、母親の変化に混乱中だが、週1回の電話と年1～2回の外出を約束している。入所時に付き添って来た弟も、自身の体調不良のためあまり関わることが出来ないが、緊急時の連絡先を引き受けている。トラブルがあった妹が近隣に住み、月1回面会に来ることは、娘、弟共に快くは思っていないが、過去を忘れたAさんにとっては喜ばしい訪問者となっている。他に、時折小学校以来の友人が訪ねてくる。社交的で面倒見が良い一方、他利用者と自分を比べて見下した態度をあらわにすることで、孤立する場面も多い。自分はこの施設の職員側の立場だという意識もある。

【本人の意向】 「もうここをやめようと思っています。」

【事例の発生場所】 施設